

唐津・松浦郷土史誌

末盧國

惲彦

令和八年二月二八日刊

嶋田十郎左衛門天草一件覚書

大阪市 寺沢光世

はじめに

「嶋田十郎左衛門天草一件覚書」（以下嶋田覚書と略記）は東京の宮内庁書陵部の図書寮文庫に所蔵されている。単独の一冊の資料ではなく、「武辺叢書」の中に収められている。この叢書は正編三六巻・附記一卷・続編七巻からなり、「嶋田覚書」は「続武辺叢書」の第六冊の五番目に収められている。第六冊には天草嶋原両日記、遠州浜松佐藤徳兵衛覚書、野村以心覚書、広沢六郎右衛門覚書、嶋田十郎左衛門天草一件覚書、寺田李之助外八人手柄覚書、加藤清正贈常心書翰が収められており、前後の史料とは直接関係がないと思われる。

「武辺叢書」は江戸時代の国学者伴信友の編であり、今迄に一部が翻刻されている。小浜市立図書館司書（当時）大鹿久義氏の「小浜市立図書館

館酒井家文庫伴信友文庫目録（上）」（『皇學館論叢』三巻五号、一九七〇年）によると、弘化三年（一八四六）に伴信友が没した後、その自筆稿本や手沢本は四散したが、その過半が若狭小浜（福井県小浜市）で廻船問屋を営む古河教典の所蔵となった。古河教典は明治十七年（一八八四）に伴信友の主著数十部を宮内省に貸進、同二十九年（一八九六）に献上し、宮内庁書陵部蔵となった。小浜市立図書館には「武辺叢書」がないので、「嶋田覚書」も伴信友収集の資料の一つだと思われる。

一、「嶋田覚書」の内容

今回、宮内庁書陵部の許可を得て全文を紹介することになった。組判の都合で、一部括弧で補足を入れた。原文にはないものである。また誤読などで文意の通じないところがあるが、この修正は後学に

委ねたいと思う。

覚

一、私事古主寺沢兵庫頭所二而之奉公ふり、天草有馬二而之様子今迄私事前より一言申たる義無御座候得共、私存ル様子有之付、荒増書付懸御目二申候事

一、天草有馬吉利支丹一揆指発申付、天草城代三宅藤兵衛方より申越候者、於有馬吉利支丹指発申候、天草も端々其通二有之候間、唐津より少々人数指越申様と申来候二付、組頭四組・鉄砲頭八組罷越候、天草富岡之城本より一揆共取籠居申共幸つら（上津浦）迄九里斗も有之候二付程遠く萬事難斗候間、富岡より五里有之候付本戸と申所迄近寄り可懸と申談本戸へ罷越候事、

古主と書いていっているので、現在は別の大名の家臣になっていることがわかる。今迄は自分から天草一揆での武功について詳細に述べたことがなかったが、今回初めて言うことになったと述べている。『寺沢藩

士による天草一揆書上』（峇北町、平成一二、以下天草一揆書上または書上と略記）一五四頁よりも詳細な記述であり、また矛盾するところもない。文中の組頭四組とは岡嶋次郎左衛門・同七郎左衛門・澤木七郎兵衛・三宅藤右衛門の各組、鉄砲頭八組とは、国枝清左衛門・柴田弥五兵衛・小笠原齋・柳本五郎左衛門・渡辺与次右衛門・関善左衛門・並河太左衛門・嶋田十郎左衛門の各組を指す。以下、誰が侍

組の頭か、鉄砲足軽の頭かは自明のものとして記述されている。本来、他家に提出するものであれば、寺沢家中の誰が何の役であったかはいちいち

【題簽】 志佐 惲彦

(一九三二—二〇二五)

昭和四八年に佐賀県立博物館に奉職後一七年間、佐賀県の文化財の保護に尽力され、その後、旧厳木町教育長、唐津市・多久市の文化財保護審議会委員、平成一七年の合併後、唐津市文化財保護審議会会長を歴任された。長年、松浦史談会会長、顧問として史談会の維持運営の重責を果たされた。専門は仏教美術。令和七年三月ご逝去。

じるものである。この仏像も秘仏として御開帳日が決まっています、今回は見ることはできなかつたが、ご本尊の不動明王の横に、鎮座された高麗時代の請来仏である銅造如来高座像をご住職の計らいで見せていただいた。

次の南隣は、浄土宗の浄土寺。永禄一五年(一五六八)の創建。現在のインド風の本堂は、明治三三年に、東京築地本願寺の本堂を参考にして建立されたもの。築地本願寺の建物は、大谷探検隊と関係した辰野と曾根の同級生、伊東忠太の作品。此外には、唐津市指定の平安後期の木造阿弥陀如来立像も残る。

【熊野原神社】

浄土寺の角から、西に曲がり、熊野原通りに出て角にあるのが、熊野原神社。ここは、近世期には彦山派山伏の住坊であったところで、「松浦拾風土記」の山伏両派名寄には、「熊野原権現 熊野ノ原龍清坊」とある。維新後神社となつたもの。境内にある多くの祭神は一村一社の名残。

【大乘寺】

名護屋山大乗寺は文禄年間を開基とする日蓮宗の寺院。名護屋陣の際に加藤清正の陣屋にあつたものと言われる。

本堂正面に開基の加藤清正と日蓮上人の銅像が並ぶ。元の山門は旧唐津藩の藩校中門であつたが、現在は市に寄贈され、北城内の大志小学校前の公園入口にある。

「大島興義、小太郎の墓」

境内本堂の南にある墓地の一番北隅にあるのが大島家の墓所。鉄の柵で区画された中に二基の墓石が並ぶ。左手が小太郎。右手がその父興義を祀る。興義は幕末唐津小笠原藩の財政を一手に担う重職として活躍。廃藩後も唐津の経

濟界をリードして、唐津銀行の基礎を作る。子小太郎は耐恒寮で学び、その後、上京、二松学舎などで学び、父の要請で帰郷、唐津銀行の頭取に就任、以後は近代唐津の経済産業、交通のあらゆる場面で活躍、近代唐津の基礎作りに貢献した。唐津の偉人を祀る墓所は訪れる人もなく、寂し

く衰微している。

「唐津の函館新選組関係の墓」
前回の十人町の各寺と同じく、西寺町の寺院にも、函館新選組関係の方々の墓が残されている。大乘寺にあるのは高須熊雄の墓。小笠原胖之助と共に、上野、会津で戦い、函館の弁天台場で降伏、維新後も大正四年まで生きる。

【近松寺】

最後に、近松寺を見学。臨濟宗南禅寺派の寺。創建に関しては、数々の伝承が残る。慶長三年(一五九八)に初代寺沢広高が現在地に再建したといわれる。小笠原家の入部以来、小笠原家との関係も深く、広い墓域が本堂西側に位置し



近松寺での探訪会記念写真

ている。様々な史跡が残る寺院で、寺沢二代堅高墓、唐津小笠原四代長和墓、幕末の小笠原胖之助、小笠原長光の墓小笠原長生の墓、また、小笠原胖之助とともに唐津藩函館新選組として戦つた藩士の墓や戊辰戦争戦役者の碑も残る。

他にも、松尾芭蕉の句碑、種田山頭火の句碑、曾呂利新左衛門の造園になる庭園舞鶴園、茶道宗編流第六世中村宗珉の彰徳碑、茶室拈華庵、近松門左衛門の墓も作られている。敷地内には小笠原家の残された遺品を展示する記念館が建てられていたが、老朽化のために解体され、史料は唐津市に寄贈されている。

今回は時間が限られていたために、最後の近松寺は慌ただしく解説していただき予定時間を大幅に過ぎて終了となった。また、改めて、探訪会の機会が欲しいものである。見学の協力していただいた各寺院の関係者の皆様、そして参加していただいた皆さんに感謝して報告としたい。

(事務局)

末盧國 第二四三号
発行 松浦史談会
事務局 唐津市旭が丘六一五
郵便振替口座
〇一七二〇一七一三〇八〇四